

# チャペル週報

2020年度春学期

## メッセージ集

チャペルへの招き 嶺重 淑

雨でも、雪でも、咲いている花 田 禾

今年のイースターは家で踊ろう 大宮有博

関西学院に集い、ともに学ぶということ 大田詠子

一人一人の存在が平等に重んじられる世界の実現に向けて 舟木 讓

ソーシャルディスタンスと心の距離 井上 智

インノチェンティ捨子養育院を訪問して オムリ慶子

一つになって集まっていると—ペンテコステ（聖霊降臨日）によせて 打樋啓史

紙上のチャペル—メディアとしての週報 赤江達也

ことばの力 山田直子

上ヶ原での48年間を思い出しながら、今考えていること 宮寺良平

風、いのち、呼び声 李 政元

夏休みを前に—コロナ禍で大学生活を奪われた学生を想いながら 小西砂千夫

関西学院宗教センター

## チャペルへの招き

嶺重 淑

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため、入学式が中止になっただけでなく、春学期の授業も通常の形で始められないという異例な形でのスタートとなりましたが、これから始まる学生生活をぜひ充実したものにしていってください。そしてそのためにも、勉学であれ課外活動であれ、在学中に打ち込んでいくテーマを速やかに見つけてください。さらにもう一つ、せっかく縁があってこの大学に入学したのですから、自分が通う大学の特質についても知っておいてほしいと思います。

さて、関西学院を特徴づけている重要な要素として「キリスト教主義教育」が挙げられますが、これをもっとも象徴的に示しているのが、通常は第一時限と第二時限の間に実施されるチャペルアワーです。もちろん、キリスト教主義を掲げる大学は日本にも数多く存在し、それらの大学においても同様の時間をもたれています。しかし、大学の各学部で同一の時間帯に並行してチャペルアワーが守られているような大学は関学をおいて他にないように思います。

チャペル（礼拝）というと、「堅苦しくて退屈そう」というイメージがあり、抵抗を感じる人も少なくないと思いますが、このチャペルアワーは、キリスト教信者を対象とする教会の礼拝とは異なり、これまでほとんどキリスト教と接したことがない一般学生を対象にしています。内容的にも、いわゆる宗教儀式として行われるのではなく、むしろ日常の慌ただしさからしばし解放され、自分自身を見つめ直すひと時をもってもらおうという主旨で行っています。チャペルでの講話（奨励）も、狭い意味でのキリスト教の内容に限定されず、講話者の人生論や体験談等様々であり、その他、様々な音楽団体による演奏や、様々な活動を実践している方々の活動報告等を聞く機会も多くもっています。

今年度は残念ながら、当面の間、通常のチャペルアワーを実施することはできませんが、各学部で、また宗教センターから定期的にメッセージを発信しています。ぜひそのメッセージを受け取って、関西学院をより身近なものに感じていただければと思います。

(宗教総主事・人間福祉学部教授)

## 雨でも、雪でも、咲いている花

田 禾

いつもならドキドキ、わくわくで4月の新しい学期を迎えるのに、今年度はほとんどの方が不安な気持ちを持っておられるのではないのでしょうか。先日、久しぶりに研究室に入ったところ、60枚のマスクが机の上に置いてありました。「マスク！」それは以前教えた学生からのプレゼントだったのです。教員としての幸福感にひたり、感無量でした。

新型コロナウイルス感染症は2月に中国でひどくなり、マスクの生産も間に合わない状態の中、武漢へ寄付された日本からの支援物資の箱に書かれた一文が中国の人々の注目を集めました。「山川異域 風月同天」。大学の近くにある廣田神社はこの一文を「三月の言葉」として選び、「これは約千三百年前、鑑真を招聘するため長屋王が袈裟千枚に刺繍して贈った詩の一節で、『山河は違えど同じ風が吹き、同じ月を見ている仲ではありませんか。』という意味」と丁寧な解説付きでした。この詩に心動かされた鑑真は自ら日本行を決心したとのこと。武漢の人々もまた、日本がこの詩を通じて連帯の姿勢を示してくれたことに深く感謝したということです。

武漢だけではなく、中国のほかの都市の人々もこの友情を大切にし、日本が大変な状況になった時、「青山一道 同担風雨」という唐の詩人王昌齡の詩を書いた段ボール箱と共に、中国からの支援マスクが日本に送られて来ました。日中両国一緒に戦いましょうとの気持ちを表すマスクは、国際協力のシンボリック的存在となったわけです。

日本では町中マスクを着用する人の姿を見るのはごく普通で、マスクの重要性についてみんな理解していますが、2月にアメリカにいる友人から「マスクを付けていたせいで、嫌われた」との話を聞いて、驚きました。マスクというものを通して、文化の異なり、他人への理解と尊重、そして国際協力、経済能力等様々な分野における違いが垣間見られることも興味深いと思います。

さて授業はどうする？マスクを着用する？しない？外国語の勉強は発音を練習しないと、でも、などなど迷っているというのが正直なところ。春が来たら花が咲くと同様に、どんな困難があっても、いい結果に向かって、頑張りましょう！

(経済学部教授)

## 今年のイースターは家で踊ろう

大宮有博

**イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出して下さいます。(聖書)**

目の前に亡くなった人が現れた。そういう経験をしたことがある。以前いた大学では毎年、退職された方々をお招きする宴会があった。その席でのことである。そのちょっと前に、私は退職されたA先生の訃報を受け、その方を追悼する祈りを教授会でささげた。そのA先生が、私の前に笑顔で立っていたのである。A先生は私がその大学で働く随分前に退職された方だったが、同窓ということで私の研究室に時々遊びに来て下さっていた。

「やあ大宮先生、久しぶり」。もはや戸惑いしかない。この人は私にしか見えていないのか？いや、別の人も談笑している！なぜ誰も驚かない？

ところで、亡くなった人との思い出には心残りがつきものだ。もっと会って話をうかがっておけばよかったとか、都合がつかずその方のご葬儀に参列できなかったとか…。しかしその人は、私の目の前で食べて飲んでいる。ふと呟いた。「ここはエマオか…」

宴会の後、やっとわかった。私は着任して2年目だったので知らなかったのだが、退職されたAという名前の先生は2人いたのだ。私はよく確認せず、生きているA先生を思い浮かべて、別のA先生を追悼する祈りをささげたのだった。

イースターとは、十字架にかかって死んだイエスの復活を祝う日である。(卵が安い日ではない！) イエスの弟子たちは、イエスが亡くなる前日の夕方まで、今の日常がずっと続くと思っていた。きっと明日もイエスの話を聞ける、そして近いうちに、貧しい者はいない「神の国」が訪れると信じていた。しかしイエスは突然逮捕され、次の日には処刑され、多くはその顔を見ることなく葬られた。ところが、死んだはずのイエスにエマオで会った仲間がいるという噂が広がった！この噂は、私たちも死んだイエスと会えると信じるとイエスに会えるという希望に変わった。そして、死は終わりではなくて、復活という希望の始めであるという信仰が生まれた。

今年の新入生の皆さんは、突然高校生活が終わってしまい、心残りのまま卒業されたのではないだろうか。進路も決まったし、みんなで遊ぼうとか、卒業旅行をしようとか…。

イースターを祝うことが今年の新入生にとって、もう会えないと思っていた人と会えるという希望に、そして突然終わった高校生活がそれでもいい思い出として今日も明日も生きる力になるようにと祈っている。

(法学部宗教主事)

## 関西学院に集い、ともに学ぶということ

大田 詠子

世界規模の感染症危機にあつて、この問題の解決のために医療、介護、行政など最前線で奮闘されておられる方々、諸症状や差別、経済的打撃のために苦しんでおられる方々を覚えます。私たちは、毎日の報道やインターネットでの言説を通して、自分がどうあるべきか、何をなすべきか、突きつけられます。自分が恐ろしいウイルスの運び屋となり、意図せず誰かを傷つけてしまうリスクにおびえ、一人で過ごす時間が増えています。安穏と過ごしてきたこれまでの日々は遠い過去となり、「戦時」「非常時」「緊急時」といった言葉が胸を騒がせます。

そんな中にあつても、私たちは、垣根なきラーニング・コミュニティである関西学院に集っています。物理的にはキャンパスを離れていても、「関西学院」の名のもとに、ここでなすべき学びのために集められています。大学では4月21日から「オンライン授業」が手探りで始められました。授業を運営する教員にとっても、バックヤードで支える職員にとっても、受講する学生のみなさんにとってもはじめての試みです。不自由なこと、面倒なこと、わからないことが山のようにあり、正解はだれも持っていない状況です。途方に暮れそうになりますが、自分やだれかの無知を嘲笑したり、不器用さを責めたりすることに、意味はまったくありません。どうかいまこそ、関西学院のコミュニティをもって互いに支えあい、互いに励ましあいましょう。

1949年から愛され続ける校歌「A Song for Kwansei」の冒頭にはこう歌われています。

That we may both receive, and give,  
May live to learn, and learn to live,  
Kwansei, we throng,-

我等うけ入れ、また与えんため  
学ばんが為に生き、生きんが為に学ぶため  
関西学院よ、われら集う。

(Edmund Blunden 作詞、東山 正芳訳)

そうです、私たちは、他者から受ける者であると同時に与える者であり、学びのためにいま生かされ、よりよき明日を生きるために、ともに学ぶのです。

特に新入生のみなさんにとっては、本当に苦しい学院生活の幕開けとなりました。しかしいまこそ私たちの連帯が強くされ、この春学期のみなさんの学びが、豊かでかけがえのない、価値あるものとなるように祈っています。

そして、美しいキャンパスでみなさんと笑顔で会える日が、一日もはやく来ますように。

(聖和キャンパス事務室職員 (教育学部担当))

## 一人一人の存在が平等に重んじられる世界の実現に向けて

舟木 讓

関西学院は昨年、創立 130 周年を迎え、本年は、創立母体であったアメリカ南メソヂスト監督教会にカナダ・メソヂスト教会が経営に参与して 110 年となります。また、その時に赴任された C. J. L. Bates 宣教師が第 4 代院長（のちに初代学長も兼務）に就任されて 100 年を迎える記念の年でもあります。両教会の共同経営に至る背景には、公的な教育機関における宗教教育を禁ずる「文部省訓令第 12 号」（1899 年公布）に対して、吉岡美國第 2 代院長が、「聖書と礼拝なくして学院なし」という言葉のもと、建学の礎であるキリスト教を堅持されたという歴史的出来事が存在します。この英断の結果、高等教育機関への受験資格はく奪等が起り、在校生は減少、経営的な危機が到来しますが、カナダ・メソヂスト教会の支援により、財政的に回復し、また、大学昇格に向けての準備が Bates 院長のもとで開始され、その実現のために西宮上ヶ原キャンパスへの移転が行われました。そして、1934 年には大学昇格を果たし今日に至っています。キャンパス移転当時、不要な壁や垣根のなかったキャンパスに対して、Bates 院長は” We have no fence” という言葉を残されました。この言葉によって、物理的な垣根のみならず、人と人を隔てている様々な垣根を取り除く人々を社会に送り出すことが、関西学院の大切な使命の一つであると示されたと考えられます。

今、世界は新型コロナウイルス感染拡大による恐怖と不安の中で、希望を見いだせない状況に置かれている多くの人々がおられます。また、ソーシャル・ディスタンスという感染拡大防止のために人との距離をとったり、会話の際はマスクを着用したり、なるべく人と直接会わないように心がけたり等の注意喚起がなされています。直接顔と顔を合わせてコミュニケーションを取るという、これまで人間関係や社会を豊かにしてきた日常が奪われ、目に見えない垣根を積極的に設けて過ごすように呼びかけられているような状況の中、孤独を感じている人も多いでしょう。

しかし、「適切な距離」を取って人や社会とかかわる、ということを積極的に捉えなおすとき、近づきすぎていては見えない、他者の存在の大切さや豊かさ、また社会の多様性や課題に気づいたり、自分自身の再発見ができたりという機会を与えられているとも考えることができます。そこから私たちが本当に取り除くべき「垣根」に気づき、この世界を真に平和で一人一人の存在が平等に重んじられる世界へと変えるための道を共に見出せるよう、この試練の時、互いの存在に思いをはせながら、その実現に向けて共に心を合わせて過ごして参りましょう。

(院長)

## ソーシャルディスタンスと心の距離

井上 智

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、様々な場でお仕事をされておられる多くの方々のお働きに心から感謝いたします。

新型コロナウイルスは、自分で移動することができず、「人」が運ぶことによって、感染が拡大していくと言われていています。そのため、密接、密集、密閉のいわゆる3密が言われ、さらには、緊急事態宣言が出されてから外出自粛が求められています。また、人と人との接触を避けるために「ソーシャルディスタンス」を取る必要があるとも言われています。具体的には、2m以上の距離を取るや、1.8mの距離を取る・・・など。新型コロナウイルスの感染方法は接触感染と、飛沫感染と言われ、その中での飛沫感染を防ぐために人と人との距離を取る「ソーシャルディスタンス」が求められているわけです。

人と人との距離を取る。外出自粛。そのために、私たちはなかなか、家族以外の方と接する機会が減ってしまった方がおられるのではないのでしょうか。私もその一人です。家族以外にはほとんど話さない。そんな生活が続いています。なんとなく、やる気が起こらない。なんとなく、気分が乗らない・・・そのような思いになってしまっています。

そのような時、しばらく連絡をとっていない方から電話が入りました。「先生、お元気ですか？」と。近況報告をしたり、お互いの仕事について話し合ったり。電話を切るときに、「実は・・・」と。なんなのか聞いてみると、「なかなか外出出来ず、自分の中で人と人との間に距離が出来てしまっているので、夜、友人に電話をしているんだ」と。「このような時だからこそ、電話をして、心の距離を縮める工夫をしているんだ」。確かにそうだなあと思い、早速、私も実践してみるようにしました。4年ほど連絡をとっていなかった高校時代の友人、大学時代の友人、教え子、結婚式を挙げた友人、だいたい、30分ほどの電話ですが、懐かしく、また、旧交を温めることができました。そして、人と人との距離ができ、なんとなく鬱々とした思いが少し晴れていくような気がしています。

人と人との距離を取らなければならない状況だからこそ、リアルな距離はとっても、心の距離を縮める努力をしてみたいと思うのです。外出自粛の中で、1日1件、大切な誰か、しばらく連絡をとっていない友人に電話をし、心の距離を縮めてみませんか？鬱々とした思いが晴れていくかも知れません。心の距離を縮めた、その先に、私たちを包む大きな愛を感じる事ができればと願います。

(宗教センター宗教主事)

## インノチェンティ捨子養育院を訪問して

オムリ慶子

昨年3月、イタリアのフィレンツェにあるインノチェンティ捨子養育院(Ospedale degli Innocenti)を久しぶりに訪れた。

インノチェンティ捨子養育院は、1400年代初頭に絹織物ギルドが中心となり、世界で最初の捨子のみを受け入れるホスピタルとして建設された。建物はブルネレスキの設計による、イタリア・ルネサンス様式の建造物として有名であるとともに、デッラ・ロツビアによる装飾やポッティチェッリの作品をはじめとするルネサンス期の芸術品も所蔵しており、捨子養育院というより美術館の様相である。

今回の目的は、600年続いた捨子養育院として、トスカーナの研究者を中心とした大規模プロジェクトの成果である、整理された記録を閲覧することと、その歴史を目に見える形にリニューアルされた博物館を訪れることであった。

この訪問で印象的だったことが3つあった。1つ目は博物館に展示されていた捨子が身につけていた印(しるし)であり、2つ目は1400年代から保存されている膨大な数の捨子たちの記録であり、3つ目はインノチェンティ出身の生き証人たちのビデオである。

捨子の印は、マリア像が彫られたメダイユ、十字架、布切れ、貝、ボタン等が展示されており、いずれは子どもを迎えに来たいと願っている親が、我が子を認識できるように印を子どもと一緒に置いたものである。しかしながら1400年代~1500年代は度重なるペストの流行もあり、乳児の死亡率が高く、捨子の記録を見ると、ほとんどの乳児が養育院に受け入れられて数日から数週間で死亡している。中には乳母に乳をもらうこともないまま死んでしまった子どももあり、子どもの記録が十字架の印で終わっているページを見ると、やるせない気持ちに陥る。1700年代以降になると、衛生管理やワクチンなどで死亡率は減少するが、子どもたちは幸せだったのだろうか。時代は現在に飛ぶが、インノチェンティ出身者の証言ビデオを視聴した時、たった1度きり会いに来てくれた両親の記憶を臉から引き出すかのように話す老婆の姿や、結婚して子どもを産み自分の存在意義について苦悩する女性の話など、それぞれの思いを淡々と、あるいは吹っ切れたかのように語る姿に衝撃を受けた。

私はインノチェンティを後にし、自分が生きてこの世に在る奇跡を思考せずにはいられなかった。

(教育学部教授)



一つになって集まっていると—ペンテコステ（聖霊降臨日）によせて

打樋 啓史

新約聖書の使徒言行録によれば、イエスの復活から50日目に、弟子たちが「一つになって集まっていると」、彼らの上に聖霊が降りました（2章1節以下）。その様子は、「激しい風が吹いて」来たと言われ、神が息吹を注ぐように彼らに働きかけたことが表されます。この聖霊の降臨によって、信じる人々の群れである教会が生まれたことを祝うのが、クリスマス、イースターと並ぶキリスト教の三大祝日の一つ「ペンテコステ」（聖霊降臨日）です。「ペンテコステ」という名は「50番目の（日）」を意味するギリシア語に由来し、今年は5月31日（日）に祝われました。

聖霊降臨は弟子たちが「集まっていた」ときに起こったのでした。彼らは「集まっていた」のです。何気ない言葉に見えますが、「集まる」とは大きな意味をもちます。彼らは使命を共有する最も親しい仲間たちでした。この日も、それぞれ住まいを出て、皆と「集まる」ことを楽しみにして、その場所に向かったのでしょう。会った時には握手や抱擁で挨拶を交わし、喜びを表現したのでしょう。そして、神に感謝して共に祈ったことでしょう。神の息吹である聖霊は、そうして集まった彼らの上に降ったのでした。それが教会の始まりだったということです。弟子たちが「集まる」ことなしには、聖霊降臨はなかったのです。

私たちも、家族や仲間と集まり、授業、クラブ活動、チャペルアワーなどに集まります。「集まる」ことは私たちにとっても大きな意味をもち、そこには出会いと交流と喜びがあります。私たちが集まる場所にも、神の祝福の息吹が注がれるのです。

しかし、この数か月コロナウィルスの影響で私たちは「集まらない」日々を過ごしてきました。この体験の中で、普通に集まれるのがどれほど大きなことなのか、深く知ることになりました。同時に思うのは、空間的・身体的に同じ場所に「集まらない」日々の中でも、私たちは「集まっていた」ということです。Webミーティングのことだけではありません。「集まらない」体験の中で、普段一緒に集まり、言葉を交わしていた人々のかけがえのなさに気づき、それに改めて感謝し、不自由な状況の中で互いに心を通わせることができた。そしてまた同じ場所に集まる日を、かつてなかったほど強く待ち望むようになった。これは、「集まらない」けれども、深い仕方で「一つに集まる」体験だったと思うのです。

皆で集まるのがこれほど嬉しいことだという再発見は、私たちが再び集まる時、そこに新しい意味を与えてくれるでしょう。この日々を通して、人間関係において成長することができたなら、そこにも神の息吹・聖霊が注がれていたと言えるのではないのでしょうか。

（社会学部教授・宗教主事）

## 紙上のチャペル——メディアとしての週報

赤江達也

感染症の流行によって、大学の授業もチャペルアワーも、しばらくは多くの人が同じ場所に「集まる」ことがむずかしそうです。これまでは、授業であれば教室に、チャペルアワーであれば礼拝堂に集まっていました。それらが、インターネットを介した「遠隔的」なあれこれに替わっています。

このような状況について考えるための手がかりとして、明治時代に「無教会主義」を唱えた内村鑑三の言葉を紹介したいと思います。「我が教会」（1912年）と題された短いエッセイの一節です。

我にもまた教会あり、手をもって作りたる地上の教会あり、されどもこれ木と石とをもって作り、教壇と座席とを備へたる教会ならず、我が教会は黒と白とをもって作れる紙上の教会なり、その教師は著者にして、会員は読者なり、もつとも簡単にしてもつとも廉価なる教会なり、しかももつとも鞏固なる教会なり、木と石と神学と信仰箇条とが壊れて後になおのこる教会なり、紙の上の教会なりといえども花崗石をもって作りたりよりもはるかに耐久的の教会なり。

（『内村鑑三全集 19』岩波書店、1982年、296頁。すこし表記を変更しています。）

ここで内村は「自分の教会は『紙上の教会』である」と述べています。「無教会主義」というと「教会がない」立場に見えます。実際、内村は既存のキリスト教会から距離を取り、個人雑誌『聖書之研究』を刊行しながら伝道していました。しかし、その自分にも「紙上の教会」がある、というのです。

とくに面白いのは「木と石」／「黒と白」というメディア論的な対比です。通常の礼拝堂は「木と石」で建てられ、「教壇と座席」を備えています。それに対して、「紙上の教会」は「黒と白」（インクと紙）で作られ、その「会員は読者」です。「紙上の教会」とは、印刷メディアとともに立ち現れる読者たちの「遠隔的」なつながりのことなのです。

このアイデアにならっていえば、いまここで読まれている『チャペル週報』もまた（電子化された）「紙上のチャペル」と呼びうるかもしれません。もちろん礼拝堂でともに集まることはチャペルの中心的な要素です。ただ、この『チャペル週報』というメディアもまた、新型コロナウイルスの流行以前から、私たちをゆるやかにつないでいるのです。

（社会学部教授）

# ことばの力

山田 直子

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」（日本聖書協会『聖書 新共同訳－新約聖書詩編つき』ヨハネによる福音書 1:1-5）

今、世界では、未知のウィルスによって大きな混乱が起きています。既存の価値観が崩れ、人々は底知れぬ不安と怯えと怒りに包まれています。そうした人々の思いは SNS などの「ことば」を通じて瞬時に世界中に拡散され、さらなる混乱を呼んでいます。

そして、憎悪や差別や暴力を推奨する「ことば」を身近な人にぶつけ、あるいは SNS に投稿することで、もうすでに十分苦しんでいる人々を追い詰め、支配し、誰の心にもある暗闇の部分、あたかもそれが「人間性すべて」であるかのように振る舞う人たちがいます。そして、そう信じさせられてしまう人たちがいます。

けれど、2001 年 9 月 11 日に米国で起きた同時多発テロの被害者たちが、ワールド・トレード・センターが迫り来る機中で、あるいは、その建物の中で炎に包まれて、決して逃げられない死への恐怖に直面したときに残した数々の「ことば」を思い出して下さい。ご存知ない方は調べてみて下さい。

そこには、憎しみも差別も暴力も恨み言も、そんなものはかけらもありませんでした。

「あなたを愛している」「ありがとう」「良いことをして、楽しい人生を送ってほしい。両親やみんなも」「神様、どうか」

そこには、ただ、祈りと愛と感謝と思いやりだけがありました。それがおそらく、極限状態の、私たち人間が持つもうひとつの真の姿です。光の部分です。

神は「ことば」によって光をつくられました（創世記 1:3）。ならば、私たちも「ことば」で光をつくりませんか。こんな状況だからこそ、「ことば」を通じて優しさを交わしあいませんか。慰め、支え、励ましあいませんか。

私たちひとりひとりがつくれるのは、小さな光にすぎません。けれど、それでも、神はそれをご覧になって「良し」とおっしゃるだろうと私は信じています。

どうか、この小文に接するすべての方の上に、絶えることない豊かな恵みが注がれますように。真心をこめて、お祈り申し上げます。

（法学部教授）

## 上ヶ原での 48 年間を思い出しながら、今考えていること

宮寺良平

私は 47 年前に関西学院理学部に入学しました。それからずっと上ヶ原で時間を過ごしてきました。学部では篠原弥一先生に指導していただきました。先生は数学的な厳密さには厳しかったのですが、本当に優しく、学生の個性を認めてくださいました。先生を慕って、篠原ゼミは同窓会が続いています。先日、私の生徒が計算機を活用する数学コンテストの開催を決めた時も、先生は親身に相談に乗ってくださいました。自分の定年前になっても、恩師に世話になっています。

大学院の指導教授は工藤弘吉先生で、「研究は本当に楽しい。こんなに楽しいことで給与をもらっているのは申し訳ない。だから君たちをちゃんと教育して給与をもらう」と言っておられました。「テーマはどこにでもある」と言われていて、夢の中にも数学が出てくると言われていました。

修士課程を出て、高等部に就職しました。就職して 9 年目に博士号を取りました。高校教員を続けるか、研究者を目指すかという選択の時期でした。

ちょうどその時、公立高校への進学を拒否され、勝訴したものの、関西学院高等部を受験して合格した玉置真人君が入学してきました。彼を介助した生徒達の多くは、いろんな悩みを抱えていましたが、玉置君と関わる中で、大きく成長しました。その姿を見て、若者にとって高校時代がどんなに大切かを実感しました。そして、厳しい状況にある人を気遣うことで人間は、自分自身の人生の意味を見出せるのだということを知りました。

研究よりも、高校生と活動することが本当に楽しくなりました。しばらくは一緒に映画を作ったりしていたのですが、ある生徒が私の授業中に新しい発見をしました。驚きました。そして、高校生と発見を目指す活動を試してみようと思いました。

それ以後、生徒達と共に、国際学会で 17 回発表し、査読のついた論文は 40 編を超えました。

工藤先生が言われていた、数学の本当の楽しさが今、やっとわかったと思います。生徒達と一緒に考えているテーマは、夢の中でも出てきます。「先生の言われたことがやっとわかりました」と報告したいところですが、先生がもうおられないことが残念です。

一緒に活動してきた生徒達と共に、数学で新しい発見をする楽しさを多くの人に伝える活動を始めました。4 年前から ASEAN の教育省で発見学習のワークショップを開催したり、日本でも各地で教えています。若者を序列化するための数学ではなく、若者が協力して何かを発見する数学を伝えたいです。

(高等部教諭)

## 風、いのち、呼び声

李 政元

「主は彼らの上に現れ、その矢は稲妻のように飛ぶ。主なる神は角笛を吹き鳴らし、南からの暴風と共に進まれる。」(旧約聖書ゼカリヤ書9章14節)。

旧約聖書の創世記には、神は土(アダマ)の塵で最初の人、アダムを形づくり、その鼻に命の息を吹き込み、人は生きる者となったとあります。ヘブライ語の息(חַיָּה:ルーアッハ)には、息、風、生命、そして霊という意味があり、旧約聖書の神はしばしば風、そして嵐とともに人の前に顕われ、その風は人に命を与え、時として命を奪いました。

今、風が吹き荒れています。新型コロナウイルスによってもたらされている禍は、世界中で多くの人々の命と生活のみならず、人と人との繋がりをも容赦なく奪い去ります。

今、私たちが体験している喪失の多くの背景には、ウィルスの存在だけによるものでは説明が尽きません。私たち人間がこれまでに、小さくも誤った「合理的」な判断を積み上げてきたことによってもたらされたものもあり、その裏には大切なことの順番付けを少しずつ間違えてきたことにあるように思います。

地球規模で人とモノの移動は、かつては想像もできないほど速くなり、同時にウィルスの伝播も制御できないほど速くなりました。大都市圏を中心とした経済活動の局地化は一見すると合理的に見えますが、そこでウィルスは猛威を振るい、全てが揃っていたはずの大都市の医療資源をあっという間に食い潰し、救えたはずの多くの命が失われています。

今の危機は私たち1人ひとりに問いかけます。「あなたは、これからどうするのか」と。

今回の出来事は多くの人たちの人生を一変させました。突如ウィルスとその病によって人生を中断させられた人々、愛する家族が奪われた人々、人を疑うようになった者、人を差別し批判・攻撃するようになった者。その一方で、人をより信頼するようになった者、自分以外の誰かの命を守りたいと考えるようになった者、この世界をより良くしたいと考えるようになった者もいるのです。

イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった(マルコによる福音書4章39節)。

今、激しく吹き荒れる風のなかから、私たちに「静まれ」との呼び声が聞こえてくるように思います。

(総合政策学部教授)

## 夏休みを前に－コロナ禍で大学生活を奪われた学生を想いながら

小西砂千夫

自肅太りはごめんだと、ウォーキングに努めている。幸いも、自宅近くの河原で、適度な距離のコースがとれる。歩いてみて気がついたのは、風は川に沿って流れることだ。川を横切る風は滅多に吹かない。川上から川下へ、その逆。風向きは違っても、基本、そのどちらかだ。

逆風は歩きにくく、嫌になる。救いは、往路が逆風でも、帰路は追い風に変わることだ。理屈からすれば、往路で天気を呪うなら、帰路では天気に感謝となるはずだ。ところが、実際は、追い風のときには、自分の脚力で力強く歩いているとしか感じない。本当は、風に背中を押ししてもらっているのに。

歩きながら、考えた。逆風では他人を恨み、不運に文句を言い散らかしながら、順風では支えてくれる人に感謝せず、すべて自分の力だとおごり高ぶる……。そうだ、この話、次にチャペル講話に当ててもらったら使おう、と、ここまで考えて気がついた。コロナ禍でチャペルは当面ない……。

筆者は、41年前に本学に入学した。入学式に始まる1年生の大学生活のことは、断片的だが記憶はある。筆者の大学生活は、別段、輝いてもいなかった。それでも忘れないのは、同じ大学1年生の1年間は、50歳を超えてからの1年とは、人生における重みが違うからだろう。

その大切な大学1年目を、コロナ禍のために、友達もできず、クラブ活動もできず、たわいのないおしゃべりもできず、キャンパスに来ることすら禁じられているのが、今年の1年生だ。なんともやるせない。1年生の一部から、「なんとかしてほしい」という声が上がっていると聞く。当然のことである。

私たち教職員は、そうした学生たちの気持ちに向き合い、できることは少ないとはいえ、言葉尽くし、思いを尽くして、学生たちに寄り添わなければならない。労を惜しまず、学生サポートに努めるときである。

「主は与え、主は奪う」(ヨブ記1:21)とある。この言葉を発したあとで、ヨブは、想像を絶する試練に遭うのであるが、少なくとも、キリスト教の神は信賞必罰ではない。この聖書のメッセージを、行いをもって学生に伝える必要があるのだと思う。

まもなく夏休み。秋学期に日常のすべてが戻ってくるとも期待できないのだが、少なくとも、コロナ禍で学生生活が奪われた学生の心が養われて、秋学期への備えができることを祈りたい。

(人間福祉学部／大学院経済学研究科教授)